

「み言葉には力がある」

(マタイによる福音書 4 : 12-23)

マタイ福音書はガリラヤから主イエスの活動が始まったことを、「世を救う光はガリラヤに現れる」というイザヤの預言を引用し強調しています。歴史のなかで何度も異邦人に支配されてきたガリラヤは、正統のユダヤ教から見れば、異教に汚された地、救いが訪れるはずがない地でした。しかし、神の救いの光は誰よりも暗闇に住む人々に差し込みます。

その活動のはじめ、ガリラヤ湖を歩いていた主イエスは、シモンとアンデレという兄弟、続いてもう一組の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとヨハネにも声を掛けます。彼らは自分の生活を成していた漁業道具、そして家族を残したまま、すぐに従います。常識的に考えると驚くべき決断ですが、マタイ福音書はこの出来事を非常に淡々と記しています。なぜなら、この箇所では著者は、「主イエスの弟子になるにはこのような資質がなければならない」などということ強調したいのではなく、「主イエスの言葉には一瞬にして人間の運命を変えてしまう力がある」ということ、そして「その力ある言葉を語る方がここにいるぞ」ということを伝えたいからです。

主イエスは「悔い改めよ、天の国は近づいた」と言われました。主イエスの出現こそ天の国の到来に他なりません。二組の兄弟たちを見て、語りかけた主イエスの後ろには、この「天の国」があるのです。二組の男たちの決断を即座に引き起こしたその力とは、この天の国からの力、この世を創造した神の言葉の力に他ならなかったのです。

悔い改めよ、と言われる主イエスは、わたしたち一人ひとりを見つけ、声をかけてくださいます。その主イエスを見つめ、その声の力に突き動かされることで、わたしたちもまた悔い改めることができます。わたしたちにその力が無くとも、主イエスの声、み言葉にその力があります。わたしたちはただ、その主イエスのみ言葉に留まり、み言葉を胸に日々生きるならば、み言葉と共にある歩みのなかで、その力あるみ言葉によって変えられていきます。そうして、み言葉によって世界が変えられたとき、わたしたちは主イエスとともに、天の国を生きるものとされます。